

戦後 70 年—記録と記憶から考える—

浅野怜央・塩見高央・吉田奈都子

2015 年 10 月 10 日に NHK の E テレで「ETV 特集むのたけじ 100 歳の不屈～伝説のジャーナリスト次世代への遺言～」が放送された。高橋恭子ゼミの 5 期生は「戦後 70 年—記憶と記憶から考える—」というテーマに基づいて、興味を持った方に取材している。

我々 3 人は今回、ドキュメンタリー監督である河邑厚德さんに上記の番組についてお話を伺った。河邑さんは過去に多くの戦争番組を手掛けている。

「戦後 70 年」という節目を河邑さんはどのように思っているのか。我々若者はどう向き合うべきかを探りたいと思う。

河邑厚德氏 (写真右) : 1948 年愛知県生まれ。71 年に NHK に入社以来、様々な切り口からドキュメンタリー番組を制作。

独創的な方法を用いて、これまで制作してきた番組は国内外の賞で多数入賞している。とりわけ戦争に関する番組を多く手掛けていることも特徴的である。



番組概要

ことし 100 歳を迎えたジャーナリスト、むのたけじ。戦前・戦中は朝日新聞の記者だったが、「大本営発表のウソを書き続けた責任」をとって敗戦と同時に退職。戦後は、故郷の秋田で地方紙「たいまつ」を 30 年にわたって自力で発行した。記者として戦前・戦後

の日本社会を取材し続け、膨大な記事と発言を残してきた伝説のジャーナリストである。

「戦争を絶滅させる」。その言葉や生き方は、読者のみならずジャーナリストをめざす若者にも影響を与えてきた。

95歳を過ぎた頃から特に年少者や若者への関心があふれだしたという。「今の若者たちと話していると、新しいタイプの日本人が出てきたと感じる。絶望の中に必ず希望はある。戦争のない世の中を見るまでは死ねない」。

100歳になった今も食欲は旺盛、講演や取材をこなす気力は衰えない。戦後70年のいま、伝説のジャーナリストの足跡とそのこん身のメッセージを通じてこの国の未来を考える“熱血”ヒューマンドキュメント。(番組ホームページより引用)¹



「なぜむのさん？/番組の反響」

・“むのたけじ”という青年のような人間

この番組は2015年1月に100歳を迎えたジャーナリストのむのたけじさん(上部写真右から3番目)に焦点を当てている。

むのさんの歩みと百歳の日常を描き、この国の未来を考えるドキュメントである。

むのさんは、一人で戦争責任を取って朝日新聞を辞めた新聞記者であり、また戦前、戦中、戦後を取材し記憶する最後の日本人とも言われている。

—なぜむのさんにフォーカスを当てたのですか？

むのさんに着目した理由として、まずは年齢。100歳という現役のジャーナリストは奇跡的な人である。人として興味を持った。

戦後70年の番組は沢山あるが、映像ドキュメンタリーは映像を通して人間を伝えるもの。

この人は何者なのだろうという関心。取材者の決定は“興味”から始まる。生身の人間性や言葉の力を、映像を通して伝えたかった。

—むのさんと触れて、河邑さん自身の考えが変わるようなことはありましたか？

考えが変わるというのは幻想だと思う。誰かすごい人に会って変わったというが、それはきっかけであり、その人が変わるべくして変わったのだと思う。

僕自身が思ったことは、長生きすると面白いなと思ったぐらいかな。

むのさんは、本当に青年のように感じる。

自分の考えをまっすぐ貫き、人生に筋を通してきた人間であると感じた。

・番組への反響はやりがい

—番組への反響はいかがでしたか？

むのさんはもう大喜び。いいものを撮ってもらったと言われるのが、自分自身の一番の喜びである。むのさんへの取材はこの一年沢山あったが、一時間でむのさんのいいところを引き出せていると言われた。

—視聴者からの反響はありましたか？

NHK はコールセンターがあり、視聴者からも多くの意見をいただいた。

嫌な意見は一つもなかった。時間が少し遅いので、もっと早くしてほしいとの意見もあった。会長が榎井勝人さんなのに、よくこのような内容を放送してくれたという声もあった。

「番組の構成・細部」

・一つ一つ状況に応じて吟味する

—番組冒頭の「2 万 5567 日目の夏の朝」という表現はどのような意図がありますか？

人が生きていくのは1日1日。何年という表記ではスルーされてしまう可能性もある。表現を少し変えることでそれがフックになり注目される。

—番組内で、字幕のある場面とない場面はどのように決めているのですか？

文字スーパーはテリー伊藤さんがはじめて導入した。これは視聴者に文字を読ませることによってチャンネルを回さず視聴率を維持するため。

今回はそういう理由ではなく、むのさんは50歳で歯をすべて失っており、ある部分では聞き取れない場面もある。ムードや雰囲気にもよるが、聞き取りにくいところは字幕も入れた。

また、音をクリアでとれないところは字幕を入れている。

つまり何かルールを決めて字幕を入れているのではなく、その場面その場面で決めている。例えば、むのさんの不思議な雰囲気が出ている場面では字幕をあえて入れないという選択

肢をとることもあった。

—ナレーションに山田孝之を起用した理由は何ですか？

ナレーションというのは演出の根幹に関わっている部分である。

アナウンサーを起用するとそれなりのクオリティーは保障されるが、そういうものとして聞こえてしまう。基本的にむのさんの青年の頃の一人称で統一したいという考えがあった。そこで、若い俳優を起用したいという考えに至った。むのさんの若いころの性格、一匹的狼な性格を考えたときに、山田孝之さんの血が立ったような演技と重ねて、いいと思った。音の監督とも相談して、演技力の高い山田孝之さんを起用することになった。

—お寿司を食べるシーンや口のアップのシーンを入れた意図は何ですか。

イメージでは妖怪物語にしたかった。むのさんは生きていることが奇跡。

その生きていることを表現するうえで、食べるシーンやリハビリのシーンを入れた。

—冒頭の足をたたくシーンもそういう意図ですか？

あのシーンは儲けたという感じ。なかなかむのさんのプライベートな部分を撮れなかったが、何かの流れで、あのシーンを撮ることができた。

・一方でドキュメンタリーは押し付けではない—解釈は自由—

—終盤のシーンですが、むのさんの撮り方がローアングルでした。これも意図があるのでしょうか。

映像の作品において、監督が一つ一つ意図して作っているものではない。受け手の側で感じ、面白いと思ってもらえるのがいい作品である。一方向でみせられても、勉強のようなものならいいが、ドキュメンタリーがそういうものではない。解釈は自由である。

・現在に意識を置く

—過去と現在を行き来する構成に意図はありましたか？

常に現在が軸にあるため、必ず現在に帰るようにしている。ドキュメンタリーは今を撮るものである。時代に対する感覚がなくなったら、もうジャーナリズムじゃない。

コラム 河邑さんの取材に対する心構え

「取材をするということは、その人の時間を奪うし、ある意味では責任も背負うことになる。」河邑さんはこのことを意識して仕事をしてきた。時間を提供してくれているのだから、その人が考えていることを的確に伝える責任があるという。

ちゃんと視聴者の気持ちに届けることが大切であり、それがプロフェッショナルとしての責任である。伝わらないと意味がない。

チームで番組を制作しているので、上からいろいろ言われることもある。しかし、向き合うべきは組織ではなく、レンズの向こう側にいる人たちであるべきであるという。撮って終わりという取材のやり方は大変失礼である。河邑さんは、取材相手の立場に立ち、一人のジャーナリストとして視聴者に伝える責任感をもつことを重視していると感じた。

河邑さんは感じる戦後 70 年という節目

・過去の経験を未来へ生かすー過去は今につながっているー

ー戦争について番組で取り上げることをどのようにお考えですか？

戦争を過去の歴史の出来事だと感じてはいけない。過去にこういうことがありましたというとりえ方ではだめ。戦争は今、現在の出来事ととらえるべき。

歴史を学ぶということは、自分が立っている位置を確認する作業でもあり、これからどういう生き方をすべきか考えるものとなる。今はその意識が欠けている。

前向き思考といわれるが、過去を踏まえないと無意味なものになる。

今年は戦後 70 年ということもあり、多く取り上げられたが、2 年後、3 年後にはケロッと忘れられる。メディアは常に目の前にあるものを追い求めるため、前やっていたことは忘れられてしまう。そこにメディアの衰弱を感じる。

出来事をくりかえし、くりかえし伝えないといけない。人間は忘れてしまうもの。

番組が商品化してしまっている。視聴率を取れたら勝ちという風潮。

やらないといけないことを数字がとれなくてもやる。それがジャーナリズムの責任である。くりかえしとは repeat ではなく、新しい伝え方で、今の視点で過去を見直すことが重要。それには作る人の工夫と努力が必要。

ーこのような番組をどのような世代に特に伝えたいですか？

やはり若い世代に伝えたい。昔話になってしまっている人たちに、他人事ではないということをもってほしい。

・人間の強みは学べる事ー経験が全てではないー

ー河邑さんご自身は戦後 70 年という節目をどのようにお考えですか？

70 年という節目は、物を作る立場からチャンスであると考えている。

むのさんを取り上げるにしても、戦後 67 年でやるよりも、70 年でやるほうが、観る側のモチベーションも上がっている。普段よりも伝えやすいと感じた。

僕も戦争を知らない世代。だから僕は仕事を通じて、いろいろな人の話を聞くことで、自分の中で戦争はどういうものか感じるようになった。だから可能性としても、今の 10 代、20 代の人たちも人から話を聞いたり、いろんなドキュメンタリーや本を読んだりすれば、戦争はどういうものか自分のものになるということ。

つまり経験以外からも人は学べるし、それは時間を飛び越えるものである。経験した人は勿論強いが、経験していなくても、その時代に戻れるのが人間のインテリジェンスだと感じて

取材を終えて

私が河邑さんの取材を通じて、ドキュメンタリー番組もそうだが、取材者としての大切なことを学んだ。特に印象に残った言葉が、『概念的な質問には概念的な答えしか返ってこない』という言葉である。つまり具体的な答えが欲しければ、自分自身もその質問に対して主体的に捉え、その意見を通じて質問するべきなのである。それが真の取材者であると感じた。

それには質問する相手を第一に考え、尊敬しなければならない。

将来的に記者になりたい自分にとって河邑さんのこの言葉は一生大切にしていきたいと感じた。そして取材というのは、方法論があるわけじゃなくて、人と人とのぶつかり合いっていうのを改めて深く感じた。(浅野怜央)

今回のインタビューで、ドキュメンタリーの制作には型があるわけではないことを知った。撮影や字幕、音声に決まったパターンがあるわけではなく、その都度の状況を把握した上で一つずつ考えて対応する。しかしそれは決して視聴者への押し付けではない。視聴者側はドキュメンタリーを自由に解釈してもよいのである。

また、ドキュメンタリーは過去との関係から現在を映し出している。過去があって今がある。過去を見つめなおすことは大切だが、現在という時間軸の上に立っているという意識を持つことが大切である。

「戦後 70 年」という言葉に対して、距離をとることなく身近なものとして感じ、一人一人が日々現在を見つめなおすことが大事だと感じた。(塩見高央)

私は河邑さんへのインタビューを終え、人として、そして取材者として大切なことに改めて気づかされた。表面的な質問には概念的な答えしか返ってこないことや、「よい質問」をすることで「よい答え」が返ってくること、など一見当たり前のことのようにだが、大切なことである。質問したことに対して、「あなたたちはどう思う？」と逆質問されることがあったが、上手く答えられなかったことに対し、自分が準備不足であることを痛感した。

また、むのさんのことを語る河邑さんはとても生き生きしていた。むのさんがこの番組を見たときに、「すごく良い物を作ってくれました！」「言いたいことが全て出た！」と大喜びしていたと語っていたが、それは河邑さん自身がむのさんに対して心から関心を持ち、本気で向き合っていたからだろう。

今回のインタビューでは、「戦後 70 年」のことだけでなく、今後自分がメディアと関わる

上で大切なことを学ぶことができた。(吉田奈都子)

注

¹<http://www.nhk.or.jp/etv21c/archive/151010.html> (2016 年 1 月 21 日閲覧)